

タンザニア研修報告書

医学部医学科4回生 S.T, T.M , H.K , Y.K (Male)

・研修目的

タンザニア現地に足を運び、都市部・農村部での医療、ユニセフの活動や現地 NGO の活動を見学することによって国際保健医療について理解を深める。また、現地の医師、学生などと交流することにより国際感覚を養う。

・活動報告

ムヒンビリ大学病院研修 8月19日～25日

ムヒンビリ大学病院ではタンザニア小児科学会会長である Dr.キセンゲにお世話になり、小児科病棟を中心に回診を見学した。小児科病棟のほかに感染症病棟、心臓外科病棟を見学した。外来治療見学や、カンファレンスに出席した。またこの期間中ムヒンビリ大学の学生ともよく交流を行った。

ユニセフ8月27日

UNICEF 事務所では、タンザニア UNICEF オフィスマネージャーである安田直史先生とのブリーフィングを行った。タンザニアにおけるユニセフ活動の概要と実態、現在何に力を入れているのかということを中心に学んだ。安田直史先生の紹介により現地 NGO 見学が実現した。

DAIL(韓国の NGO)見学8月23日、29日

DAIL は1988年に創設された韓国の NGO 団体であり、韓国国内だけでなくネパール、カンボジア、フィリピン、中国、そしてタンザニアで活動を行っている。貧しく、社会的に弱い人々に対し食料を配給するというのが主な活動である。今回は Feeding Program や Education Program に参加した。

Feeding Program では採石場として知られる Mutongani Mecco という極貧地域で子供たち約 650 人にパンと牛乳を配給した。

Education Program では学校へ行けない Mecco 地域の子供達に教育を行っていた。それに参加し、縄跳びやドッジボールを教え、最後にはサッカーや歌を歌って楽しんだ。

AMREF (Africa Medical and Research Foundation) 8 月 28 日

AMREF は東アフリカを中心に活動している NGO であり、コミュニティーと協力し、コミュニティー自体を活性化させ、ヘルスシステムを強化することでアフリカの人々の健康を改善しようとする団体である。Keep Babies Safe を標語とした Mother Support Project に実際参加した。そこではたくさんのお母さん(父親も数人いた)を集め、HIV 感染者に対する Family support、Maternal support を介したメンタルケアや、HIV などの感染症予防や栄養摂取の指導、Family Planningなどを地域の母親たちに行っていた。また AMREF は「HIV ママの会」という HIV 感染した母親が定期的に集まり、互いに助け合う活動も推進しており、実際その中のメンバー数人に話をすることもできた。

Masashi 村見学 8 月 30 日～9 月 1 日

タンザニア南部に位置する Masasi 県に足を運び、県庁の保健省の職員の方に県内の病院やヘルスセンター、診療所、学校の様子を案内していただいた。Masasi の保健体制は Hospital が 1 棟、Health Center が 3 棟、Dispensary が 37 棟で成り立っていた。訪問した Mukomaind Hospital は設備が充実しており、しっかりとした手術室もあった。3 シフトによる 24 時間体制で運営されており、1 日に 50～100 人の患者が来るらしく、在籍する Medical Doctor は 3 人では相当厳しそうだった。タンザニアではこのような医師不足対策として医療行為可能な資格を 4 つに区分し、間口を広げ、医療を行える人数を少しでも多くする方法をとっている。4 つの資格は上から Medical Doctor (international に医療を行える)、Advanced Diploma (タンザニア国内で医療を行える)、Diploma (検査、治療、薬の処方のみで手術を行えない)、Certificate (検査、治療のみ行え、処方も制限がある)に分けられる。Health Center や Dispensary にも訪問した。訪問した Health Center は設備が充実しており、ワクチンなども冷凍保存されていた。海外から援助を受けた設備のうちのいくつかはまだ包装が取れておらず、それを扱える医師がいないようであった。Medical Doctor の資格を取りに行った Diploma がすぐに戻ってきてそのような設備も使えるようになると誇りを持って話していたが、訪問した時点で少し埃をかぶっており、実際に必要なものと援助にズレがあるように感じた。Dispensary は書類や薬が置かれているだけで設備と呼べるものは見当たらず、近くの人々への簡単な治療と薬の処方を行っているみたいであった。Dispensary のような小さな施設でも HIV 陽性者記録が置かれており HIV 感染者の把握にはかなり力を入れているように感じた。

・実習を通して

今回の実習を通してタンザニアの文化やコミュニティーに触れ、ムヒンビリ大学やマサシ村の病院見学、ユニセフや NGO の活動を見学することで国際保健医療について深く学ぶこ

とができたと思う。現地で活動している人々と話をしたり、実際活動を体験してみたりすることによって今後海外で働く際の大きな基盤を築くことができた実感した。

・最後に

今回の研修は岸本国際交流奨学金の援助により実現しました。この貴重な経験を今後の医師人生に活かしていきたいと考えています。また来春大阪で開かれる小児科学科会の発表に向け、さらに考察を深めていきたいと考えています。本当にありがとうございました。